

## ファレノプシスのバーク培地における肥効調節型肥料施肥による管理技術の実証

### 要約

ファレノプシス栽培における肥効調節型肥料の利用は、液肥と同程度の生育であり、また、肥料代が低減できることが確認できた。

### ○ 展示のねらい

ファレノプシス栽培では、培地としてバークを利用することが主流となっているが、施肥管理はミズゴケ培地時と同じ液肥中心であることから施用ロスが大きい。そこで、効率的な施肥管理が可能な肥効調節型肥料を利用した施肥管理技術を実証する。

### ○ 主な成果

表 肥料代比較

No.	資材	施用量 (g/3.5 寸鉢)	施用 回数	1 回当たり 単価(円)	総施用 計(円)	1 鉢あた り(円)	10 万鉢 (円)	4 区との 差額(円)
1	肥効 270	3	1	0.772	0.772	1.1494	114,940	-308,860
	カリ肥効	1.5	1	0.3774	0.3774			
2	肥効 360	4	1	1.03	1.03	1.4074	140,740	-283,060
	カリ肥効	1.5	1	0.3774	0.3774			
3	肥効 270②	3	1	1.037	1.037	1.4144	141,440	-282,360
	カリ肥効	1.5	1	0.3447	0.3774			
4	液肥	300ml/回	40	0.093	3.72	4.238	423,800	-
	肥効 270②	1.5	1	0.518	0.518			

#### ※ 4 区【慣行区】

※肥効 270：肥効調節型肥料 270 日タイプ (14-11-13)、肥効 360：肥効調節型肥料 360 日タイプ (14-11-13)、カリ肥効：肥効調節型肥料 180 日タイプ (2-0-38)、肥効 270②：肥効調節型肥料 270 日タイプ (14-7-10)

生育は、区による差は見られなかった。

肥料代は、4 区 (慣行区) に比べると 1 区は 72.9%減、2 区は 66.8%減、3 区は 66.6%となり、大幅なコスト削減につながった。

### ○ 今後の方向性

肥効調節型肥料を使用した栽培の生育は、慣行区とほとんど差が見られず、また、肥料代も大幅に削減できることから、普及性はあるものと思われる。1～3 区とも生育に大きな違いはなかったことから、いずれも使用できる技術であるが、この展示ほの成績の肥料代からは 1 区の 270 日タイプがよいものと思われた。

実施機関：河内農業振興事務所経営普及部 実施場所：宇都宮市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315